慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	永井荷風の感性と音感覚：風景と音風景をめぐって
Sub Title	
Author	山岸, 健(Yamagishi, Takeshi)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2012
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.17 (2012. 7) ,p.158- 159
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2011年度大会報告要旨
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20120700-0158

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田社会学第 17 号（2012）

永井荷風の感性と音感覚

―風景と音風景をめぐって―

山岸　健

人生を旅している人間は、それぞれの身体によって大地に、世界に住みつきながら、日々、環境やさまざまな対象と対話する状態で人びとのなかで、風景のなかで身心を支えつづけている。人びとは環境や世界、いろいろな対象との触れ合いにおいて、まことに多様な体験のなかで、そこで生活しながら生存することができる意味世界を持続的に構築しているのである。

人びとのなかで、人びとともに人生の旅びとは社会的世界で一日、一日をかたちづくっているが、時とところによっては人影が目に触れないこともある。そうした場合でも人間は大地に支えられて、風景によって包みこまれるような姿で環境や世界との触れ合いを体験している。

「私は私と私の環境である」といったオルテガ・イ・ガセーは、対話的な生において人間を理解しているが、対話の対象となっている環境は、オルテガにおいては風景だった。

環境の音を音風景と呼ぶ（マリー・シェーファー／山岸美穂）。大地にはさまざまな音風景が体験される地点がつぎつぎに見出される。サウンドマップづくりがおこなわれる。

作曲家、武満徹には音の大地、音の川、音の庭という表現が見られる。彼は水、夢、数字を思い浮かべながら音楽をイメージしており、音の庭をつくること、それが武満においては作曲だった。

ところで永井荷風、彼が三田山上の慶應義塾で教壇に立っていたことは広く知られているが、庭に注がれた荷風のまなざしがある。今日のアークヒルズ界隈だが、麻布市兵衛町に住んでいた時に荷風の耳に触れたさまざまな音がある。鐘の音も彼の耳にとどいていた。

永井荷風といえば『日和下駄』に特に注目したい。日常生活と人生、日常的世界、人間の生活と生存を多様な場面と次元において理解しようとする社会学、まさに社会学的人間学や音風景研究、さらに感性行動学、風景学などの分野と領域において永井荷風の感性と想像力、行動と行為、体験領域と意味世界、荷風の音感覚などは、まことに注目に値する。

荷風には＜生活の音調＞（おんちょう）という言葉がある。暮らしのなかの音、人びとの耳に触れる音は、時代とともに変化してきたのである。和楽器、三味線と尺八が荷風の書斎の薄暗い床の間の片隅に飾られていたが、彼の耳にはこうした楽器の奏楽の音色が触れていたのである。荷風は、「楽器は恋人の絵姿にも等しい」と綴っている。［文献：『荷風全集』第 7 巻、岩波書店、413 ページ、420 ページ、参照、「楽器」（明治 44 年 10 月）］

荷風には「鐘の声」、「蟲の声」などと題されたエセーがある。声―聲は、音と身体と感覚、

感性、想像力としっかり結ばれている。人と人とのつながりと絆は、人間にとって人生を旅する大きな力だ。音や音楽も人生の旅びとにとって大切な支えや力となっている。人生を広く深く生きることは、私たちの大切な使命なのだ。ノヴァーリスは大地を陶冶することを人間の使命と見ている。

永井荷風においても、柳田國男においても、さまざまな音が声（聲）という言葉で表現されているように思われる。柳田には市の声、山の声という言葉がある。時代の変遷とともにさまざまな声は、一括して音という言葉で表現されるようになったのか。

荷風は和楽に関心を抱いていたが、アメリカやヨーロッパ、フランスに滞在していた時には洋楽を相当に体験している。彼の『ふらんす物語』には西洋音楽事情と呼ぶことができるような音楽についての記述が見られる。

荷風の耳は、音楽によって、自然の音や文化の音、文明の音によって、なによりも生活の音によって育まれたのである。荷風の心情、情調、生活感情の深いところにさまざまな声（聲）が生きているのである。

制度としての社会の時間の外で生きている人はいないが、人生の旅びとがどのようにして、どこまで深く意味づけられた人間的時間を生きつづけるかということが注目される。荷風のなかなかに深い人間的時間は、明らかにさまざまな声や音楽によって意味づけられていたのである。

人生の旅人の力は、環境や世界、さまざまな対象との触れ合いによって得られるのである。声や音ほど微妙な対象、出来事、現象はないだろう。消えていく声や音ほど人間に深い思いを抱かせる支えや大地はないと思う。闇という文字には音が姿を見せている。旅する人間は、人生行路において、いつも光明を探し求めつづけている。人びとを傷つけるような声（音）もあるが、人生行路の道づれとなっているような風景や音風景がある。信頼できる人びと、道づれは、きわめて大切だ。

2011 年 3 月 11 日、午後 2 時 46 分、前例を見ないほどの大災害で日本列島においてなにもかもが大きく変わってしまった。人間と人間との絆、共同生活、家族と家庭、コミュニティ、社会的世界、大地と風景、音風景などへのアプローチが一層、重要な方法となったのではないかと思われる。

どのようにして社会学の力をよりゆたかに蓄えて、世の人びとのためにどのようなかたちでその力を発揮していくのか。社会学にさまざまな期待が集まっているのではないかと思う。

“人生に意味を”　サン＝テグジュペリ

（やまぎし　たけし　慶應義塾大学名誉教授）